

関係性理論から読み解く児童期の向社会性の発達的変容

○若松美沙・倉盛美穂子

(福山市立大学大学院教育学研究科)

問題と目的

子どもの向社会性行動は、生活の中で重要な他者や仲間に対して行う特徴がある(村上・西村・櫻井, 2016)。小中学校では、特別の教科道徳に「思いやり」を含む価値項目を設け、将来を見据えて、多様な他者と関わり合いをもち、相手の立場を考え、相手の気持ちを尊重するといった社会性の発達を促す教育に重点が置かれている。

小学生や中学生を対象として、向社会性行動を調べた研究によると、概ね小学生の方が中学生よりも友だちに対する向社会性行動を行う頻度が多いことが明らかになった(村上ら, 2016; 二宮, 2010)。また、向社会性行動には表出性行動と、待つや見守る等の非表出性行動の両面があり、非表出性行動は、年齢上昇とともに増加し、個人内部に依拠する道徳判断水準レベルが高くなることが示されている(山村・中谷, 2012; 山村, 2013; 宮里・高橋・森川, 2015)。小学生から中学生にかけて向社会性行動の表出傾向が減少し、非表出の傾向が増加する背景を検討する必要がある。

向社会性行動の生起メカニズムに着目した研究によると、向社会性行動の実行および不実行には、「援助責任の所在」や「実行能力の査定」等が関係することが見出されている(二村, 2017; 竹村・高木, 1987, 1990; 高木, 1997)。これらの研究は、大人を対象とした研究であるが、小学生や中学生においても、「援助責任の所在」や「実行能力の査定」等の判断が、向社会性行動の表出や非表出につながっているのかもしれない。

本研究では、小学生が、向社会性行動を表出する場合と表出しない場合の理由について予備的なデータを収集し、児童期における向社会性行動に対する理由の発達的変化を明らかにする。

方法

対象 A県内の小学生9名(男児5名, 女児4名)

調査時期 2017年11月

手続き 面接において質問紙を実施した。記入が難しい場合は、同席の母親に代筆を依頼した。

質問紙の構成

場面 山村(2013)では、非表出性行動が道徳的

に不自然ではない学習援助、貸与、心理的援助の3場面を設定している。本研究では、学習援助は友だちが宿題をしてくることを忘れた場面、貸与は活動に必要な持参物を忘れた場面、心理的援助は友達が泣いている場面の3つである。

質問項目 各場面に対して、どんな行動をする(しない)か、そして、そうする(しない)の理由を複数挙げてもらい、それぞれの理由を実際のどの程度思い浮かべるかを5件法で評定させた。

結果と考察

向社会性行動を表出する(しない)理由内容分類

理由内容を「自分の立場や状況を基にした理由」と「他者(友だち)の立場や状況を基にした理由」という軸と「心情や能力を考慮した理由」と「利益もしくは不利益を考慮した理由」という軸の4つの型に分類した(表1)。

表1 理由内容分類表

A	他者(友だち)の立場や状況を基にして、 他者の心理や能力を考慮した理由	友だちが一人ぼっち になりかわいそう
B	他者(友だち)の立場や状況を基にして、 他者の利益もしくは不利益を考慮した理由	すぐ人に頼ってしま う
C	自分の立場や状況を基にして、 自分の心理や能力を考慮した理由	自分だけが楽しむの は嫌なので
D	自分の立場や状況を基にして、 自分の利益や不利益を考慮した理由	けんかの原因になる かもしれないので

分類した結果、向社会性行動を表出する場合の学習援助場面の回答傾向は、貸与・心理的援助場面と異なっていることが明らかになった。

向社会性行動の発達的変化 発達的変化を明らかにするために、低学年と高学年の理由内容を比較した(表2・3)。

表2 表出する理由の発達的変化 表3 表出しない理由の発達的変化

学習援助場面			貸与場面			心理的援助場面			学習援助場面			貸与場面			心理的援助場面										
A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D						
低	1	2	3	1	5	0	3	1	7	1	4	0	低	0	0	0	0	1	0	1	1	0	1	0	0
高	6	4	1	0	3	0	5	0	4	0	5	0	高	0	2	0	3	2	2	1	0	2	1	2	2

向社会性行動を表出する理由は、学習援助場面においては、高学年になると他者の立場や状況を基にすることが分かった。貸与・心理的援助場面においては、低学年では特に他者の心情を考慮することが多く、高学年では自分の心情や能力を考慮することが多かった。表出しない理由は、高学年は低学年と比べて多く、高学年になると多様な視点から理由を考えていることが分かった。